

## 『石清水物語』の構想

——『無名草子』を起点として——

岡 陽 子

### はじめに

『石清水物語』前半部に、秋の君が初めて木幡を訪れる場面がある。

こわたという処を過給ふに、山ぎはくかすみわたりて、行ききもみえずたえくなるに、ついでとこるくくづれて木だちくらく、ときは木などあまたみゆる中に、八重桜の、いみじく盛におもしろき木ずゑばかり見やらるゝに、御めとまりて、(中略)馬よりおりて入給へど、人あるかたとをくて、心やすく、こゝかしこのぞきありき給へば、新殿のにしおもてなるべし、むかし覚えて、やり水のながれゆへ有て、くれ竹うへわたして、うのはな咲べきかきねなど、山里めきたり。(一七頁)

これに続いて秋の君は邸内に足を踏み入れ、姫君の発見へとつながる。いわばここから物語は本格的に姫君を話題の中心へと引き寄せたといえよう。物語の展開から見て重要な転換点にあたるこの場面、実は次のように『無名草子』発端部分に通じると考えられる。

いかなる人の住みたまふにかと、あはれに目とまりて、やうやう歩み寄りて見れば、築地もところどころ崩れ、門の上などもあばれて、人住むらむとも見えず。ただ寝殿、対、渡殿などやうの屋ども少々、いとことすみたるさまなり。庭の草もいと深くて、光源氏の露分けたまひけむ蓮も所得顔なる中を分けつつ、中門より歩み入りてみれば、南面の庭いと広くて、呉竹植ゑわたり、卯の花垣根など、まことにほととぎす蔭に隠れぬべく、山里めきて見ゆ。前栽むらむらいと多く見ゆれど、また咲かぬ夏草の茂み、いとむつかしげなる中に、撫子、長春花ばかりぞ、いと心地よげに、盛りと見ゆる。軒近き若木の桜なども、花盛り思ひやらるる木立、をかし。(一七五頁)

記録者である老尼が語りの場へと足を踏み入れていく場面。先の『石清水』傍線部Aとa、Cとcがそれぞれ対応していることは明らかである。しかし『石清水』はこれをそのまま踏襲しているわけではない。傍線部bからも明らかのように、『無名草子』は夏の設定である。そのため「軒近き若木の桜」は「花盛り思ひやらるる」にすぎない。ところが『石清水』は「やよひのはじめつかた」(一六頁)の場面、傍線部B「八重桜」が「いみじく盛」であり、代わりに傍線部C「うのはな」は「咲べき」様なのである。『無名草子』の世界が巧妙にずらされている様子が見てとれよう。

もちろん『石清水』当該場面のような描写——古びた邸宅と庭——が、物語において垣間見場面に用いられるのは常套手段ともい

える。しかし、所々崩れた築地・桜・呉竹・卯の花垣根といった素材がこれほどに一致する例は他に管見に入らない。加えて両者に共通する「山里めき」(二重傍線部)という語は、本来そこが山里でないことを逆説的に表すものであろう。『無名草子』は設定があくまで「都のうち」(二七四頁)であったからこそ、この庭の様子が「山里めき」と評されたのである。しかし『石清水』の場合、設定された場は木幡であり、「山里」と呼ばれてしかるべき空間である。事実、姫君が異母妹であると知った秋の君が父へ報告する場面では彼自身の言葉で「山里なる所へまかりて、けさなんまかりかへり侍る」(三三頁)と表され、その後も「山ざとのほどり」(六〇頁)、「山深き御すまゐ」(四八頁)、「山ふかく年経ぬる所」(二〇六頁)と繰り返されるのである。とすればあえて「山里めき」と表現されたこの場面は『無名草子』を意識したものとするのが妥当ではないだろうか。

川島絹江氏は、『無名草子』の当該場面が花散里を下敷にし、直接には『源氏物語』少女巻における六条院夏の町の描写を利用していることを指摘しておられる。さらに『枕草子』の連想をも読み取られた上で、この方法が「自己の博学ぶり、才能ぶりを披露すること」で、以後の論が、確かな知識と才能で裏うちされたものであることを、保証するものであることを述べておられる。

では、『石清水』の場合はどうか。『無名草子』を取り込むことはすなわちその内容・物語批評を承知していることのアピールであろう。その際に、巧妙にずらして用いることによって、『無名草

子』の物語批評を全面的には受け入れないこと、つまり独自の物語世界を切り開いてみせることを宣言しているとは読めないだろうか。本稿では当該場面の『無名草子』に対するすらしの姿勢を起点として、『石清水』がいかなる物語世界を作り上げようとしたのか、その構想を探ってみたい。

## 一 「まことしからぬ」評言との関わり

『石清水』が『無名草子』の批評を全面的に受け入れた物語を指したのでないことは、『無名草子』がもっとも問題視する「まことしからぬ」ことが物語の題号とも関わる大きな要素となっていることから明らかである。

さらでもありぬべきことども。大将の笛の音めでて、天人の天降りたること。粉河にて普賢の現れたまへる。源氏の宮の御もとへ、賀茂大明神の御懸想文遣はしたること。夢はさのみこそと言ふなるに、あまりに現兆なり。(二二三頁)

ここで『無名草子』は『狭衣物語』で大臣の夢に賀茂大明神が現れて歌を詠んだことを挙げる。この結果源氏宮の入内が中止となるのであるが、この『無名草子』が批判する構図はほそままに、『石清水』においても神仏が夢に現れ、姫君の入内を阻止する。

空晴て、ほしの光りもあきらか成夜、どの御夢に、玉の冠してをきはいたる、かしら白きおきな、ほこさきに墨筆結びつけてさげもち、たゞ入にいり来るを、あやしと見るほどに、(中

略) さか木につけたる筆して、袂に物を書付るをみれば

「あだ人の重ねし夜半の衣手を雲井にいかゞおもひたつべきなめげにやあらん」と、さだかにかきつけたるを、「是はたれ人におはする」ととへば、「八まん大ぼさつの御つかひなり」とて、行過ぬるとおほすほどに、驚給ぬ。(一一四頁)

この夢は「さだくとうつゝのやうに、まがふべくもあらぬもの」であつた。そもそも、『石清水』の題号の由来ともなつてゐる伊予守の歌に対しても石清水八幡は夢の中で返歌をする。その夢もまた「さだかなりつる事共はまがふべくもあらず」(九五頁) という有様であつた。二つの夢はどちらも、『無名草子』の言葉を借りれば「現兆」といえよう。そしてそのどちらもが物語の大きな転換点に現れてゐる。『無名草子』の批判する「まことしからぬ」ことが『石清水』においては物語を突き動かす重い要素として構想されてゐるのである。しかし注意すべきは、同じ『無名草子』が問題視した、『狭衣』における天人降下については排除してゐる点である。

ことどもはじまりて、二位の中將びわ、衛門督わこん、右のおとらの宰相中将さうのこと、兵部卿宮の源中将ひちりき、藏人少將さうのふえ、殿の少將よこ笛、いづれとなくおもしろきものゝねども、ふけ行まんにすみのぼりて、えんなる夜のけしきなり。(中略) うへもことにもてはやさせ給て、おりくうちぞへさせ給笛の音の、物よりことに、雲のうへまでもみんとどむる人もやと、ゆゝしくぞ聞ゆる。(八頁)

「ゆゝしく」聞こえる笛の音であるが、あくまで天人降下は危惧に終わる。ここで高らかに笛を吹くのは春の君(殿の少將)であるため、物語の中心とはなりえない人物であることを示してゐるとも読める。しかしいずれにせよ本物語において、楽による奇瑞の可能性を示唆しつつ描かないというのは、一つの特徴ともいえるであろう。その他にも『無名草子』において「まことしからぬ」こととして取り上げられた転生やただ人の即位などは、全くこの物語には描かれない。すなわち、『石清水』が描く「まことしからぬ」構想は石清水八幡とその神託に限られてゐるのである。

## 二 物語の始発に見る八幡

「石清水」という題号は、物語の成立からさほど時を経ずに成立した『風葉和歌集』(文永八(一二七一年成立)の詞書において「いはし水の社の大將」(二六二番)、「いはしみづの中関白」(一九五番)、「いはしみづのいよのかみ」(四四六番)と記されてゐることから、成立当初からの呼び名とみてよいだろう。とすれば本物語は当初から石清水八幡をめぐる物語としての構想があつたと考えられる。そこで、以下物語における石清水八幡の位置付けについて検討したい。まず、「石清水」という題号を前提として本物語を読み始めると、早くも物語始発において石清水八幡との関わりが推察される出来事が描かれてゐることに気付く。『源氏』玉鬘との重ね合わせである。

諸先学が指摘されてゐるとおり、物語始発部分には『源氏』夕顔

の造型が色濃く投影されている。『石清水』においては、左大臣の北の方により女君（宰相の君）が迫害され、身寄りがないため西の京にある乳母の家へと逃げ、さらに常陸へと下る。そこには『源氏』頭中将北の方により迫害され、身寄りがないため西の京の乳母の家へと移動した夕顔が投影されていよう。左大臣北の方が「前代の四の宮」（五頁）という設定も、以下の物語において姉宮（女一―三の宮）の存在は全く描かれておらず、頭中将北の方が右大臣の四の君であることに基つくと見るべきであろう。これらを鑑みれば、常陸を下つて産まれる姫君に玉鬘を重ね合わせるのは当然ともいえよう。そして『源氏』において石清水八幡に唯一言及しているのが、まさに玉鬘に関わる文脈なのである。

「神仏こそは、さるべき方にも導き知らせてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り折り申したまひし松浦、宮崎同じ社なり。かの国を離れたまふとて、多くの願立て申したまひき。今都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ」とて、八幡に詣でさせたてまつる。そのわたり知れる人に言ひ尋ねて、五師とて、早く親の語らひし大徳残れるを呼びとりて、詣でさせたてまつる。「うち次ぎては、仏の御中には、初瀬なむ、日本の中にはあらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあむなり。（中略）」とて、出だし立てたてまつる。（玉鬘②一〇三頁）

ここで玉鬘一行は無事京へと戻ったことを神仏に感謝する。その感

謝の対象となるのが八幡なのである。玉鬘に関わる靈験といえば初瀬・石山が想起されがちであるが、ここで「うち次ぎては」とあるように、初瀬観音は八幡に次ぐものとして位置付けられている。すなわち、後の物語において玉鬘にもたらされる生き様は初瀬・石山に大きく関わるものであるが、都への帰還については八幡の靈験として描かれているのである。

それを念頭に置くと、「石清水」という題名の物語において、まず流浪の姫君が登場し、それが玉鬘と重ね合わされる要素を多分に持っているとなれば、この姫君の都帰還に関わるのが石清水八幡であるように設定されていると読めよう。

さらに姫君の誕生に続く文脈においては、「しかるべく我が腹に宿るべくて、かゝる国の果てにおはすべき契こそは物し給ひけめ」（七頁）と、常陸守夫妻の子として捉えられた上で、養父となつた常陸守の系譜が語られる。

このひたちも、もとのねざしは御門の御すちにて、何がしの親王とか申けるが、いかなるみだれにありけん、あづまへながされて、そのすゑぐ、あまたに成にければ、もとの身をかへて、あやしきたみのふるまひをして、弓矢とるわざをしだぬにつきぐしくもて行程に、かゝるものゝふにぞ成さだまりたりける。源氏あまた国のうちにも聞ゆれど、これはむげにまちかきながらになむ有ける。（七頁）

従来伊予守の造型を考えるにあたって重要視されてきた箇所である

が、物語冒頭から読み進めてここに至った場合、当然まだ伊予守は登場しておらず、姫君の造型に関するものとしてこの常陸守の系譜が読まれることになる。ここでは帝の末裔（源氏）が（武士）となったものとして常陸守は設定されている。（源氏）（武士）という要素が「石清水」という題号と結びついた場合、そこには当然守り神としての石清水八幡が想起されよう。そしてそれは姫君につながる要素として設定されているように読めるのである。

このように見てくると、「石清水」という題号に伴う、（夕顔―玉鬘）に対する（宰相の君―姫君）、さらにそれに続く（源氏）（武士）という物語始発のあり方は、姫君に対する石清水八幡の靈験・守護を示唆していると考えられよう。

しかし物語は次に都の情勢を描いた後、新たな可能性を提示する。伊予守の誕生である。常陸守は他の女から産まれた男子（伊予守）について「あとつぐべきものなくては、たがためもあしかりぬべく、ゆみやとるものゝならひとして、かためなくてはなきわざなれば、只わが子と思して哀れにしたまへ」（二〇頁）と妻に語る。ここで伊予守は（源氏）（武士）という常陸守の系譜を継ぐ者として明確に定義されるのである。さらに「かしまの君」と命名された後、あまりの美しさから「かまくらといふ所に、わか宮とておはします、このべたうのたうとき人」（二一頁）に預けられる。ここで鎌倉の若宮すなわち鶴岡八幡宮という「石清水」に連なる要素が提示され、そこにつながる人物として伊予守が設定される。つまり、この時点で、

先に示された常陸守の系譜が伊予守にも関わるものとして捉え直されるのであり、姫君と伊予守という二人が石清水八幡の靈験・守護の対象として浮かび上がる仕組みになっているといえよう。

### 三 八幡の役割

#### ① 姫君と父親の邂逅

姫君と仏神との関わりとして明確に描かれているのは、父との邂逅である。まず木幡において、尼君が再会をひたすら念じていたことが記される。

朝夕、後のよのいとなみをばさしおきて、おもひいたらぬことなく、心ざしをつくすめるに、（中略）すべていなかにしづみし後は、みやこにあとたえて、さるべきゆかりもなく、又うはのそらにはいかなど思ひわづらいて、仏神にも、これのみをねんじ聞えける。（二五頁）

尼君は自らの後世への祈りをさしおいてでも姫君の幸いを仏神に念じる。それに対する報いとして描かれるのが次の場面である。

としごろ、いかなるたよりに、とのにもしらせたまつらんと思ひなげくに、かゝる御なかにきゝなし聞えぬは、しがるべき仏神の御しるべにやと、いとくうれしく（三〇頁）

秋の君が姫君の元へ進入した際に、間一髪で密通を防ぎ、かつ実父への便りを得られたことを感謝するくだり。ここで尼君はこの二人の関わりを「しがるべき仏神の御しるべにや」ととらえる。尼君が

仏神に念じたことへの報いであり、靈驗と見てよいだろう。

どちらの場面も単に「仏神」とあり、具体化されているわけではない。しかし、先に見たように始発部において姫君と石清水八幡とのつながりが示唆されていることに加え、この祈りの場面は『源氏』玉鬘巻における都帰還の祈りに影響を受けていることが田村俊介氏によつて指摘されている。その玉鬘巻の祈りの対象はまさに「八幡」である。これらを鑑みれば、ここで語られる「仏神」とは石清水八幡であると読んで差し支えないのではないだろうか。

## ②伊予守の夢における神託

しかし、以下の物語展開において、神仏に関わる描写をたどると、やはり圧倒的に多いのは伊予守に関する文脈である。

①かしまの明神に詣ても、まづ思ふ心のくるしさをうれえ奉りて、かたむすびなるひたちおひの、とくる世なくてややみなんと思ふも、いみじう心ほそければ、さらずとて、いくよ有べきにあらねば、しばしの命にかへて今一度、ありしばかりのけちかさもあるべくとぞ、心にねんじ入ける。長からん事をのみのいの人多かめるに、命をなきになして、かく計きねんせん事の、なごむなしくてあらん。神のしるしを頼みつゝ、道すがらおもひなくさみ、(九三頁)

②此よにて今一度、ありしばかりの一言を人伝てならできこへしらせて、山道をもたづね入しるべにもせん、かくながら跡たへ

む事はいとかなしければ、神のしるしならでは、いかでさもあらんと、たゞひとへに神仏のはうべんをたのみ聞えて、思ひもとちめんとおもひ立て、朝夕頼みをかけ奉りたる八わたへまうで、七日こもりて、夜昼まじる事なくこのことを念じけり。「いはけなかりしより、たゞひたみに猛き道のしるべのみ祈りつかへて、とし経ぬるながびむなしからで、そこのあらそひにもつゝがなく過ぬるは、おがちからのみにあらじ。ひとへに八まん三所の御あはれみなるを、おなじくは、人のねがひをかなへ給はゞ、まさりてしのびがたき心の内をあはれとおほして、雲の上に立のほり給はざらん此かたに、ちかづきこゆる便あらせ給へ。年頃は、かぎりあらんいのちをも、しばしかけとめば、やと思ふ故にこそ、弓矢の恐れなくとも念せられしを、今はあらぬ筋に引かへて、かぎりありて長かるべき命成とも、此おもひだにかなふべくは、けふに限らんもいたみならず」覚えて、なくく経よみ、念仏申てきねんして、(九四頁)

それぞれ①は戦からの帰途の鹿島明神参詣、②は戦後の石清水八幡参籠を描いており、これらはほぼ連続した場面である。

まず①においては、伊予守は恋心の苦しさを訴えた上で、命に替えてでも今一度姫君に近づきたいと念じる。それは命を長らえることを祈る人が多い中であつて、この祈りが通じないことがあるうか、と語り手によつて評されることとなる。さらに②では思いをいっそう強め、「たゞひとへに」神仏を頼みとする。その姿勢の象徴がこゝ

で描かれる七日間の石清水参籠なのである。ここでは「朝夕頼みをかけ奉りたる八わた」という表現により、伊予守の石清水八幡を頼みとするあり方がここに始まったものではないことが示されている。

しかしここで注意すべきは、これまでの伊予守の八幡信仰は、破線部のように武勇に関わるものであったという点である。その祈りの報いとして先の戦いにおいても無事を得られた、と伊予守はとらえている。その靈験を自覚しているからこそ、伊予守は異なる願いであつても八幡を信じて祈りを捧げる。姫君への接近の願いである。それに対する石清水八幡の答えが、伊予守の夢における

「夢ばかり結びおきける契りゆへながきおもひに身をやこがさん」という、題号にもつながる和歌なのである。

そして以後の物語展開において、確かに伊予守の姫君への想いは数度の逢瀬により叶えられた。しかし、それらは本当に石清水八幡の靈験として描かれているのであろうか。

確かに、石清水八幡の神託を受けた後、水を手にする姫君の姿を垣間見た伊予守は「八まん大菩薩」（二〇〇頁）と心の中で念じる。そしてその夜、とうとう姫君の元へと侵入した際には「しかるべくは、八まんの御しるべにて、かく計もちかづき給へるにやあらん」（二〇一頁）と心に石清水八幡を思い浮かべる。これに続いて姫君との逢瀬が実現するという物語の展開を見ると、石清水八幡の靈験により伊予守の願いが叶えられたように読めよう。

しかし、逢瀬を経た伊予守の心中を以後の物語においてたどって

いくと、必ずしも八幡の靈験とはとらえきれないことが読みとれる。

「八わたにての夢を思ひ出るにぞ、「結びおきける契故」と有しは、かゝるべくてなりけりと思ひあわせらるゝに、さるべき世々のちぎりにて、のがるまじくおはしましけるは、我身一のとがにはあらねど、つみおもき心ちして、もろともに流しそふる涙のうみは、あまも釣するばかり成を、（二〇二頁）

逢瀬の後、伊予守は先の石清水八幡が歌を詠みかけた夢を思い起す。しかしそれは石清水八幡への祈りの報いとしてこの逢瀬をとらえているのではない。あくまでそうなるべき「契り」であつたと見るのである。それは次の箇所からも読みとれる。

我にもあらでかゝることの出来ぬは、たゞ一筋にさきの世の罪なれば、力なきことにおぼしゆるして、露のあはれをかけ給へ。おもひ余りて、八わたにこもり、いのちにかへて申たりしに、しかくゝの夢に見せ給へりしも、のがれがたき御契りのありてこそは、つげしらせ給ひけぬ（二〇九頁）

逢瀬そのものは前世からの「逃れがたき御契り」によるものであり、それを夢で知らせたことこそが石清水八幡の靈験であつたととらえるのである。さらに次のような描写もある。

さきの世にいか結びしちぎりにてとくるよもなくものはか  
なしき

結ぶの神をかこちては、いとゞ（二一八頁）

前世の契りに思いをはせる伊予守の文。ここで恨むのは八幡の靈験

ではない。二人の縁を結んだ「結ぶの神」なのである。また、伊予守の思いだけでなく次のような表現も見える。

〔八わたにまうでゝも、今はあらぬ筋に引かへし、「此心をやめ給へ」ともうさるゝも、とかくにくるしげなる願也。されば、神、もうけぬみそぎなるにや、まさるなる恋しき也。(一一四頁)〕

ここで伊予守は「此心をやめ給へ」と、姫君への恋心を断ち切れるよう折る。しかしその願いは叶わずいよいよ思いが募ることが『伊勢物語』六十五段の「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」をふまえて語られるのである。

これらの例から、逢瀬は前世からの「契り」によるものであること、石清水八幡の神託は伊予守の恋そのものにはたらくのではなくあくまでその「契り」を伊予守に告げる機能を持つものとして語られていることが確認できよう。すなわち、物語は一見伊予守の恋愛成就を石清水八幡の靈験によって成し遂げるかのように語り初めておきながら、実際には伊予守と姫君という二人の宿命を知らせるものとして神託を描き、次の展開を導いていくのである。

### ③父親の夢における神託

ではもう一つの転換点となる父関白の夢に現れた石清水八幡はどうであろうか。先に記したように「さだくとうつゝのやうに、まがふべくもあら」ぬ神託を受けた関白は、さまざま思いをめぐらす(一一五頁)。そして「かゝる夢のつげなからましかば、しらずして

参らせたらんは、いかにびんなきことにおぼされまし」と考えた結果、入内中止を決断するのである。この関白の決断が年老いた中務宮との結婚許可へとつながっていくのであるが、それは結果として伊予守と姫君の最後の逢瀬を導くことになる。

最後の逢瀬において、姫君はそれ以前とは異なり「あはれになつかしげなる御もてなし」(一三五頁)を見せ、別れにおいては自ら歌を詠みかける。我が身を嘆く歌ではあるが、心の通い合いを示すものとして和歌があると考えれば、ここで姫君が進んで歌を詠んだことの意味は大きい。すんなりと入内するのではなく、神託による入内中止・中務宮との結婚を経たが故に、伊予守は姫君との心の通い合いを得られたといえる。

このように見ると、関白の夢における石清水八幡の神託は伊予守の思いを叶えるためにはたらいの靈験とも読めよう。

しかし、最終的に伊予守は一人出家へと向かい、姫君の方は略奪されたとはいえ今上の一宮を産み「さういなきさいの宮」となる。それはまさに悲恋通世譚といえる。伊予守は姫君との心の通い合いが得られたとはいえ、その相手を奪われたことに違いない。

そもそも姫君が入内し「上なき位」に上ることは、物語始発から予言されていたことであつた。そして物語末尾において「ものしりのかんがへ申たりけることは、いまぞおとらはおほし合せけん」(一一五二頁)と、その予言がまさに実現したことを父関白が知るといふ構図を本物語は持っている。この予言の実現という物語の大枠を考



えれば、邂逅当初からの予定通り姫君が中務宮と結婚せず入内するという展開も一つにはあり得たはずである。しかしその場合、姫君の入内前の密通は大きな問題となつたであろうことが、父関白の夢告げ後の逡巡から読みとれる。ところが神託によつて一度入内を中止し、中務宮との結婚を経ることにより、密通は問題視されなくなる。その密通は中務宮には知られるが、宮はそれを許す。その後入内したことで、帝は自分との逢瀬の前に姫君が宮と逢瀬を持ったことは当然了承し、伊予守との密通は隠蔽されることとなるのである。

このように姫君の密通・罪が問題視されないことは、本物語の特色の一つとしてすでに論じられているところであるが、その罪の隠蔽に大きく寄与したのが石清水八幡の父関白に対する神託であると捉えられるのではないだろうか。すなわち、八幡の靈験は伊予守にはたらいたと読める一方で、実質的には姫君の幸いにはたらいていると考えられるのである。

### おわり に

以上、二度の神託を中心に、石清水八幡の物語における役割を検討してきた。「石清水」という題号をふまえて本物語を読んだ場合、冒頭から石清水八幡は伊予守と姫君という二人に関わるものとして描かれていたと考えられる。また二度の神託はいずれも伊予守の恋愛成就にはたらくように読める一方で、実質的には姫君の物語を導くものとして描かれているといえる。

『石清水』は、全体を通した構想が見えにくいという指摘も多い。

確かに前半部における春秋の君の並列描写や秋の君の姫君をめぐる恋愛に対して、後半部は伊予守の姫君をめぐる恋愛が中心となっており、統一した主題は読み取りにくい。姫君の心情描写がきわめて少ないということも主題を見えにくくする一因といえよう。しかし、始発部の予言とそれに照応する末尾の姫君の榮達という大枠を持ち、「石清水」という題号に象徴される石清水八幡のあり方が冒頭や物語の重要な転換点において伊予守だけでなく姫君にも関わるものとして設定されていると読むならば、姫君をめぐる物語としての構想を積極的に読み取つてもよいのではないだろうか。そしてそこに大きく関わるのがもう一人の「石清水」関係者、伊予守なのである。

「石清水」という題号のもと、「まことしからぬ」靈験を大きなモチーフとして示し、『源氏』玉鬘との重ね合わせや「逃れがたき契り」をその靈験と不可分のものとして描くことにより、「石清水八幡に領導される独自の物語を一貫して構築したのが『石清水物語』である」と考えたい。

◎本文の引用は、『石清水物語』は『鎌倉時代物語集成 二』（笠間書院）、『風葉和歌集』は『新編国歌大観』その他の作品は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。ただし、『石清水』は引用本文の底本である射和文庫本（第三系統）と他本（京都大学蔵本（第一系統）、神宮文庫蔵本（第二系統）、天理図書館蔵本（第四系統））を校合し、一部表記を改めた。

\* 1 射和「たる」―京大・天理「たる」、神宮「たり」  
\* 2 射和「をき」―京大・をき」神宮「をきせき」、天理「せき」、蓬左文庫蔵本（第一系統）「たち」  
\* 3 射和「兵部卿」―京大・天理「兵部卿官」、神宮「兵部卿の官」  
\* 4 射和「なる」―京大・神宮・天理「なり」  
\* 5 射和「こと」―京大・神宮「もと」、天理「本」

- \*6 射和「つきくし」——京大・神宮「つきくしく」、天理「つきくし」  
 \*7 射和「あし」——京大・神宮「あと」、天理「跡」  
 \*8 射和「かひ」——京大・神宮・天理「おひ」  
 \*9 射和「とみ」——京大・神宮・天理「を」  
 \*10 射和「ちつき」——京大・神宮・天理「ちかつき」  
 \*11 射和「か」——京大・神宮・天理「は」  
 \*12 射和「まきる」——京大・神宮「まさる」、天理「まさり」

〔注〕

- (1) 老尼はこの後「持仏堂」へと足を運び、そこが物語展開の場となる。そして『石清水』においても、秋の君は「持仏堂」へ赴き、老翁の語りを聞く。同じ「持仏堂」の語りでありながら、〈語り手—聞き手〉の関係が〈若い女房—老尼〉から〈老翁—若い公達（秋の君）〉へと変換されている。これも『無名草子』との重ね合わせとずらしの一つと見るべきであろう。
- (2) 川島絹江氏『無名草子』の方法——いとぐちの部分の虚構に ついて——『中古文学』第二十八号 昭56・11
- (3) 本物語の成立は宝治元(三四七)年以降とするのが通説となっている。ただし、後藤丹治氏『石清水物語は果して寶治文永年間のかか』(『文学』一一七 昭8・10)、および永田明子氏『石清水物語』試論(『日本文藝學』第三十一号 平6・12)によって疑問が出され、鷺澤伸介氏『石清水物語』の系図と小考(『芸文東海』第四号 昭59・12)は改作の可能性を指摘する。
- (4) 桑原博史氏『石清水物語について』(『中世物語の基礎的研究 資料と史的考察』昭44・風間書房)、長谷川政春氏『境界・変

換・話型——物語史としての石清水物語——(『東横国文学』第20号 昭63・3)、三角洋一氏『石清水物語』の話型と表現(『物語の変貌』平8・若草書房、初出「王朝物語の行方」(『国文学』平3・9))などに指摘がある。

(5) 玉鬘と初瀬・石山の靈験については、山田利博氏『源氏物語』における初瀬と石山——玉鬘物語と浮舟物語をめぐって——(『国文学研究』第八十七集 昭60・10)、藤井日出子氏『源氏物語』における初瀬と石山——玉鬘物語と浮舟物語の宿世——(『解釈学』第二輯 平元・11)などに詳しい。

(6) 長谷川氏(前掲注4論文)は、女主人公の属性から、『とりむすめ』(養女)という擬制的関係において、木幡の姫君も玉鬘も王氏の系譜に列らなつた」と指摘しておられる。

(7) 田村俊介氏『源氏物語』を超えて——問わず語り、秋霖、石清水等——(『論集源氏物語とその前後』5 平6・新典社)

(8) 『鎌倉時代物語集成 別巻』「引歌表現索引」に指摘がある。

(9) 三角氏(前掲注4論文)は、女主人公の処女性をめぐる問題としてこの密通の隠蔽を重視しておられる。

(10) 長谷川氏(前掲注4論文)が指摘され、また中島泰貴氏『王朝憧憬と悲恋通世譚——『石清水物語』の引用と話型——』(『日本文学』48巻第12号 平11・12)が引用という視点から検討しておられる。

——おか・ようこ、広島大学大学院博士課程後期在学——